

東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所

要覧 1975





目 次

概 要

歴史と性格	1
-------------	---

組 織

運営委員会	3
-------------	---

専門委員会	3
-------------	---

研究活動

共同研究プロジェクト	4
------------------	---

言語情報機械処理	6
----------------	---

言語研修	7
------------	---

海外学術調査	8
--------------	---

助手等の現地投入	9
----------------	---

外国人研究員ほか	10
----------------	----

施 設

図 書 室	11
-------------	----

音声学実験室	12
--------------	----

言語情報機械処理準備室	13
-------------------	----

出版物一覧	14
-------------	----

職 員	16
-----------	----



概 要

歴史と性格

アジア・アフリカ言語文化研究所の目的は「アジアおよびアフリカの言語文化に関する総合研究，ならびにこれらの地域の言語に関する辞典の編製，および教育訓練を行なうこと」となっています。これを言い換えますと：

- 1) アジア・アフリカの言語，およびそれを通じて，これらの地域の歴史・社会・文化を，直接研究すること。
 - 2) それらの言語による資料の利用を容易にするための，辞典を作ること。
 - 3) それらの言語の習得を助けるための，日本語を通じた言語研修を実施すること。
- の三つになります。しかも共同利用研究所ですから，所員だけがこれらの事業に従事するのではなくて，「国立大学の教員，その他の者」で，これらと同じ研究に従事するものにも利用させることになっています。

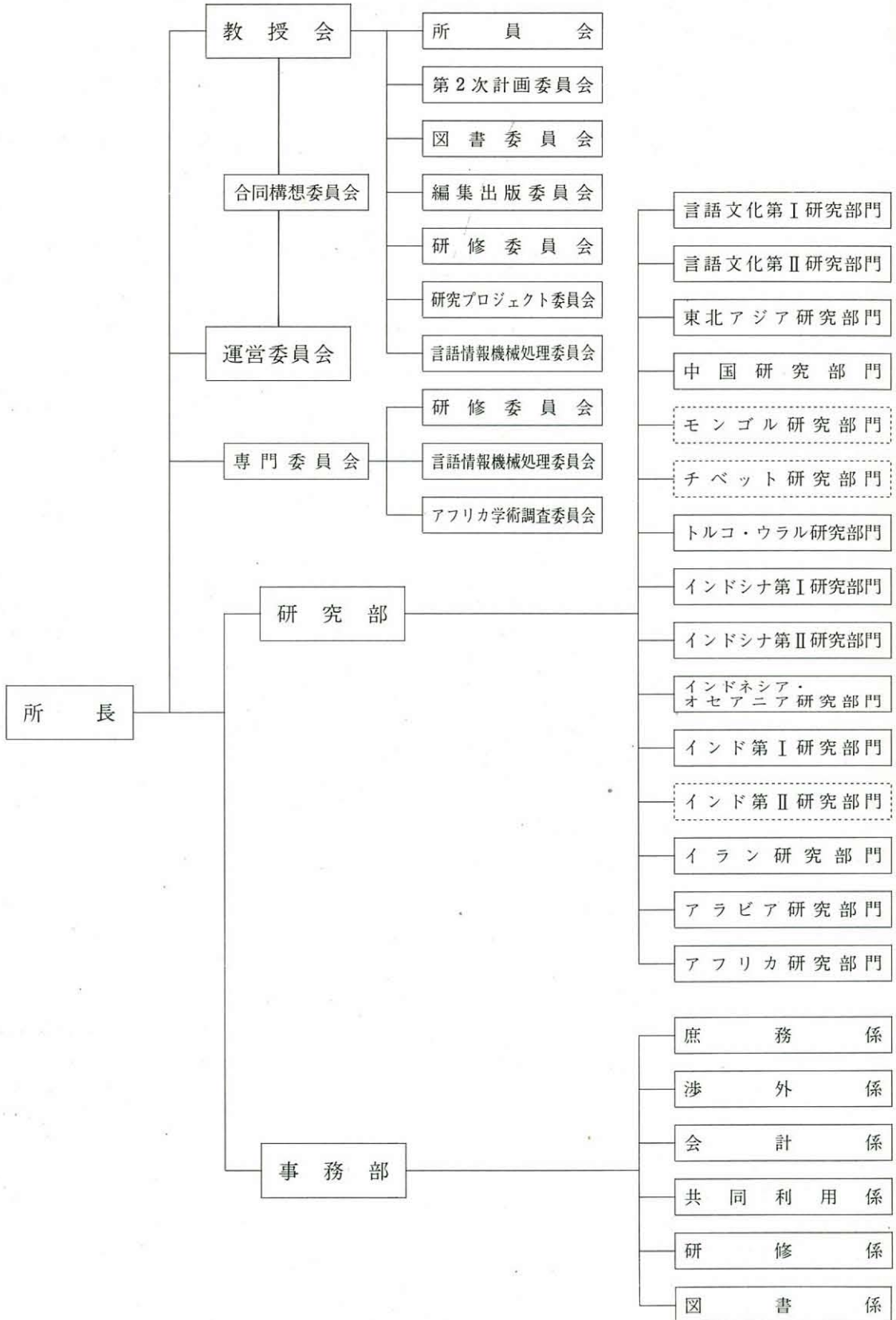
* * *

アジア・アフリカ言語文化研究所は，人文科学・社会科学系では，わが国ではじめての，共同利用研究所です。

共同利用研究所というものは，これまで自然科学系にはかなり多数ありますが，要するに，公私立を問わず，あらゆる種類の研究機関に所属する専門の研究者の便宜をはかるため，設備や材料を提供し，相互の接触や交換の機会を与え，それによって研究の発達・進歩を促進するのが，共同利用研究所の目的なのです。

そうした性質の共同利用研究所として，アジア・アフリカ言語文化研究所が発足したのは，1964年4月1日のことでした。しかしその由来は，さらに1955年，インドネシアのバンドンで開かれたアジア・アフリカ会議にさかのぼります。このバンドン会議で，はじめて「アジア・アフリカ」を一つのブロックとする観念が生まれましたが，これは当時，戦後の世界で自国の占めるべき位置を探し求めていたわれわれに，大きな影響を及ぼしました。そして日本経済が「高度成長期」に入り，アジア・アフリカ地域がわれわれの将来を決定するであろうことが明らかになってきた1960年，日本学術会議はアジア・アフリカ研究特別委員会を発足させ，翌1961年には，政府に対し「アジア・アフリカ言語文化研究所」を設立するよう勧告しました。その後いろいろのことがありましたが，結局その3年後に，東京外国語大学の附置研究所という形式をとって，アジア・アフリカ言語文化研究所が誕生したのです。

組 織



運営委員会

研究所の日常の業務の運営は、教授・助教授の組織する教授会において行われますが、共同利用研究所としての公開性を保つため、これとは別に運営委員会が置かれ、研究所の運営の基本方針などの重要な事項について、所長の諮問を受けることになっています。運営委員には、研究所の教授・助教授、および所外の学識経験者、すべて25名以内が委嘱されます。1975年度の運営委員は以下の通りです。

荒 松 雄	東京大学教授	富 川 盛 道	所員
石 垣 幸 雄	所員	中 根 千 枝	東京大学教授
石 川 栄 吉	東京都立大学教授	西 田 龍 雄	京都大学教授
伊地智 善 継	大阪外国語大学教授	服 部 四 郎	東京大学名誉教授
泉 井 久之助	京都産業大学教授	伴 康 哉	大阪外国語大学教授
岡 田 英 弘	所員	坂 野 正 高	東京大学教授
小 沢 重 男	東京外国語大学教授	藤 枝 晃	京都大学名誉教授
小 泉 文 夫	東京芸術大学教授	三根谷 徹	東京大学教授
小 堀 巖	東京大学助教授	護 雅 夫	東京大学教授
柴 田 武	東京大学教授	山 本 登	慶応義塾大学教授
祖父江 孝 男	国立民族学博物館教授	渡 辺 武 男	秋田大学長
土 井 久 弥	東京外国語大学教授		

専門委員会

また、所長の諮問に答えて、研究所の共同研究に関する専門的事項を審議する専門委員会が三つあり、それぞれ所外の学識経験者のうちから委嘱されます。1975年度の委員は以下の通りです。

研修委員会

池上二良(北海道大学教授)、泉井久之助、伊地智善継、小沢重男、柴田武、土井久弥、中根千枝、西田龍雄、服部四郎、半田一郎(東京外国語大学教授)、伴康哉

言語情報機械処理委員会

石綿敏雄(国立国語研究所言語計量研究部第三研究室長)、植村俊亮(工業技術院電子技術総合研究所主任研究官)、杉村優(図書館短期大学助教授)、田町常夫(九州大学教授)、中山和彦(筑波大学教授)、長尾真(京都大学教授)、西村恕彦(工業技術院電子技術総合研究所研究員)、淵一博(工業技術院電子技術総合研究所研究室長)

アフリカ学術調査委員会

泉井久之助、今西錦司(京都大学名誉教授)、岡正雄(元所長)、江実(岡山大学名誉教授)、中根千枝、服部四郎、山本達郎(東京大学名誉教授)、和崎洋一(天理大学教授)、渡辺光、渡辺武男

研 究 活 動

共同研究プロジェクト

共同利用研究所での研究は、所員たる教官が個人研究テーマを持って研究を行なうだけでなく、所外の専門研究者と協力することになっています。そのために共同研究員の制度があり、共同研究プロジェクトを組織し、研究を実施します。1975年度のプロジェクトと共同研究員は以下の通りです。(カッコ内は研究代表者)

言語研修に関する研究 (梅田博之)

伊東照司 (東外大)	糸賀 滋 (アジ研)	大東百合子(津田塾大)	大野 徹 (阪外大)
キュー・サクール	コッラン・ダスグプト	五島忠久 (阪教大)	ジョイスリー・ チャタルジー
武居喜春 (天理大)	千野栄一 (東教大)	西江雅之 (A A 語学院)	西原鈴子
原 誠 (東外大)	久光由美子 (お茶大)	福田権一 (中京大)	松山 納 (東外大)
宮崎 誠 (NHK)	村崎恭子 (東外大)	ムンシ・K・アザード	

言語情報機械処理のための基礎的研究 (橋本萬太郎)

イエツラヴァ・スッパラーヤル		鶴殿倫次 (東外大・院)	
ウレ・シェリーン (東大・院)		及川昭文 (筑波大)	大河内康憲 (阪外大)
大島正二 (北大)	尾崎雄二郎 (京大)	辛島 昇 (東大)	桐谷 滋 (東大)
日下恒夫 (関西大)	慶谷寿信 (都立大)	興水 優 (東外大)	五島忠久 (阪教大)
坂井健一 (日大)	佐藤 進 (都立大)	讚井唯允 (都立大)	沢島政行 (東大)
沢村正信 (神戸商大)	鄒 嘉彦 (カリフォルニア大)		辻本春彦 (阪外大)
内記良一 (東外大)	中川正之 (神戸大)	中島 久 (北大・院)	西 義郎 (鹿児島大)
西江雅之 (A A 語学院)	西田龍雄 (京大)	西原鈴子	
ネアック・ソック・チョムラン		平山久雄 (東大)	福田権一 (中京大)
星 実千代 (東洋文庫)	堀口秀嗣 (ICU)	本名信行 (金城学院大)	増野 仁 (都立大・院)
松井 透 (東大)	松本 昭 (東教大)	宮本正興 (立命館大)	梅 祖麟
望月真澄 (山梨県立女子短大)		余 霽芹	頼 惟勤 (お茶大)
ラメーシュ・マトゥール (関西外大)		李 方桂 (ハワイ大)	
王 美玉 (カリフォルニア大)			

アジア・アフリカにおけるイスラム化と近代化に関する調査研究 (三木 亘)

池田 修 (阪外大)	板垣雄三 (東大)	坂本 勉 (慶大)	嶋田襄平 (中央大)
------------	-----------	-----------	------------

福原信義 (阪外大) 前嶋信次 (慶大) 宮治一雄 (アジ研) 宮治美江子 (東大・院)
山田 稔 (東外大)

アフリカ学術調査 (富川盛道)

赤阪 賢 (学習院女子短大) 江口一久 (民博) 端 信行 (民博)
松園万亀雄 (武蔵大) 和田正平 (民博) 和田祐一 (民博)

アジア社会の原構造と変容過程の研究 (飯島 茂)

岩田慶治 (東工大) 斯波義信 (阪大) 未成道男 (聖心女子大) 高谷好一 (京大)
坪内良博 (京大) 前田成文 (京大) 水野浩一 (京大) 渡部忠世 (京大)

アジア・アフリカ文法調査票に関する研究 (石垣幸雄)

江口一久 (民博) 小田真弘 (中京大) 崎山 理 (阪外大) 田村すず子 (早大)
千野栄一 (東教大) 西江雅之 (A A 語学院) 橋本 勝 (阪外大) 山田幸宏 (高知大)

アルタイ学辞典の編纂 (岡田英弘)

神田信夫 (明大) 小山皓一郎 (北大) 佐口 透 (金沢大) 志茂碩敏 (学術振興会)
細谷良夫 (弘前大) 本田実信 (京大) 松村 潤 (日大) 護 雅夫 (東大)
森川哲雄 (阪大) 山田信夫 (阪大)

アジア・アフリカにおける象徴と世界観の比較研究 (山口昌男)

青木 保 (阪大) 阿部年晴 (埼玉大) 生田 滋 (東洋文庫) 石毛直道 (民博)
上田 将 (東経大) 上田富士子 辛島 昇 (東大) 川田順造
北岡誠司 (大阪市大) 君島久子 (武蔵大) 久米 博 (桐朋学園大) 小馬 徹 (一橋大・院)
杉山和美 (東大・院) 鈴木孝夫 (慶大) 谷 泰 (京大) 友枝啓泰 (埼玉大)
長島信弘 (一橋大) 中林伸浩 (金沢大) 福間和仁 (一橋大・院) 星野 命 (ICU)
堀美佐子 (東大・研究生) 松園万亀雄 (武蔵大) 松田 修 (国文学研究資料館)
水野忠夫 (早大) 三橋 修 (和光大) 宮尾慈良 (早大・院) 宮坂敬造 (東大・院)
宮田 登 (東京学芸大) 村武精一 (都立大) 吉田敦彦 (成蹊大)

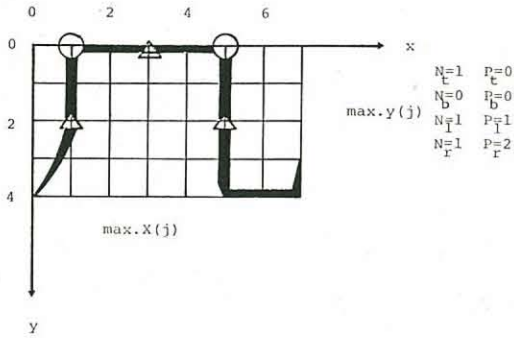
オセアニアの言語と文化の総合的研究 (土田 滋)

石毛直道 (民博) 石森秀三 (民博) 九鬼 博 (早大) 斉藤尚文 (都立大・院)
崎山 理 (阪外大) 須藤健一 (民博) 畑中幸子 (金沢大) 森口恒一 (京大・院)
山田幸宏 (高知大) 山本真鳥 (東大・院) 馬淵東一 (南山大) 吉岡政徳 (都立大・院)

インド・パーキスタン分離独立の史的研究 (中村平次)

伊藤正二 (アジ研) 加賀谷 寛 (阪外大) 桑島 昭 (阪外大) 古賀正則 (大阪市大)
近藤治 (追手門学院大) 田中敏雄 (東外大) 浜口恒夫 (阪外大) 森 利一 (琉球大)
山崎利男 (東大)

言語情報機械処理



၅၅၂၁၃၄၅၆၇၈၉၁၀၁၁၂၁၃၁၄၁၅၁၆၁၇၁၈၁၉၂၀၂၁၂၂၂၃၂၄၂၅၂၆၂၇၂၈၂၉၃၀၃၁၃၂၃၃၃၄၃၅၃၆၃၇၃၈၃၉၄၀၄၁၄၂၄၃၄၄၄၅၄၆၄၇၄၈၄၉၅၀၅၁၅၂၅၃၅၄၅၅၅၆၅၇၅၈၅၉၆၀၆၁၆၂၆၃၆၄၆၅၆၆၆၇၆၈၆၉၇၀၇၁၇၂၇၃၇၄၇၅၇၆၇၇၇၈၇၉၈၀၈၁၈၂၈၃၈၄၈၅၈၆၈၇၈၈၈၉၉၀၉၁၉၂၉၃၉၄၉၅၉၆၉၇၉၈၉၉

現代の電子工学の技術と数理情報の理論を高度に活用して、アジア・アフリカの諸言語の語料を大量に機械処理し、それぞれの言語の音韻論的、辞学的、統辞論的分析はもちろんのこと歴史的、民族学的、社会学的研究のような多目的な用途に供せられるデータベースの作製をはかっています。当研究所としましては、最も重要な事業の一つであるアジア・アフリカの諸言語の辞典や文典の編纂に、基礎資料を提供して、この方面におけるわが国の立ち後れを克服し、又アジ

၂၀၂၁၂၂၂၃၂၄၂၅၂၆၂၇၂၈၂၉၃၀၃၁၃၂၃၃၃၄၃၅၃၆၃၇၃၈၃၉၄၀၄၁၄၂၄၃၄၄၄၅၄၆၄၇၄၈၄၉၅၀၅၁၅၂၅၃၅၄၅၅၅၆၅၇၅၈၅၉၆၀၆၁၆၂၆၃၆၄၆၅၆၆၆၇၆၈၆၉၇၀၇၁၇၂၇၃၇၄၇၅၇၆၇၇၇၈၇၉၈၀၈၁၈၂၈၃၈၄၈၅၈၆၈၇၈၈၈၉၉၀၉၁၉၂၉၃၉၄၉၅၉၆၉၇၉၈၉၉

ア・アフリカ諸国との文化的、経済的交流という社会的要請にこたえようとしていますが、同時にこれは全国の研究者の共同利用に供されます。この目的のために、一方で各言語の語料に一定の音韻論的、統辞論的、意味論的情報を詳定しておき、他方ではこれらの情報を実際の研究に使いやすいようにプリント・アウトするために、トライコンやクウィックのようなプログラムが開発され、活用されております。アラビア語、中国語、朝鮮語、クメール語、スワヒリ語、タミル語、チベット語などについては、もうデータ入力の作業がはじまっています。

၅၅၂၁၃၄၅၆၇၈၉၁၀၁၁၂၁၃၁၄၁၅၁၆၁၇၁၈၁၉၂၀၂၁၂၂၂၃၂၄၂၅၂၆၂၇၂၈၂၉၃၀၃၁၃၂၃၃၃၄၃၅၃၆၃၇၃၈၃၉၄၀၄၁၄၂၄၃၄၄၄၅၄၆၄၇၄၈၄၉၅၀၅၁၅၂၅၃၅၄၅၅၅၆၅၇၅၈၅၉၆၀၆၁၆၂၆၃၆၄၆၅၆၆၆၇၆၈၆၉၇၀၇၁၇၂၇၃၇၄၇၅၇၆၇၇၇၈၇၉၈၀၈၁၈၂၈၃၈၄၈၅၈၆၈၇၈၈၈၉၉၀၉၁၉၂၉၃၉၄၉၅၉၆၉၇၉၈၉၉

၁၂၃၄၅၆၇၈၉၁၀၁၁၂၁၃၁၄၁၅၁၆၁၇၁၈၁၉၂၀၂၁၂၂၂၃၂၄၂၅၂၆၂၇၂၈၂၉၃၀၃၁၃၂၃၃၃၄၃၅၃၆၃၇၃၈၃၉၄၀၄၁၄၂၄၃၄၄၄၅၄၆၄၇၄၈၄၉၅၀၅၁၅၂၅၃၅၄၅၅၅၆၅၇၅၈၅၉၆၀၆၁၆၂၆၃၆၄၆၅၆၆၆၇၆၈၆၉၇၀၇၁၇၂၇၃၇၄၇၅၇၆၇၇၇၈၇၉၈၀၈၁၈၂၈၃၈၄၈၅၈၆၈၇၈၈၈၉၉၀၉၁၉၂၉၃၉၄၉၅၉၆၉၇၉၈၉၉

言語研修

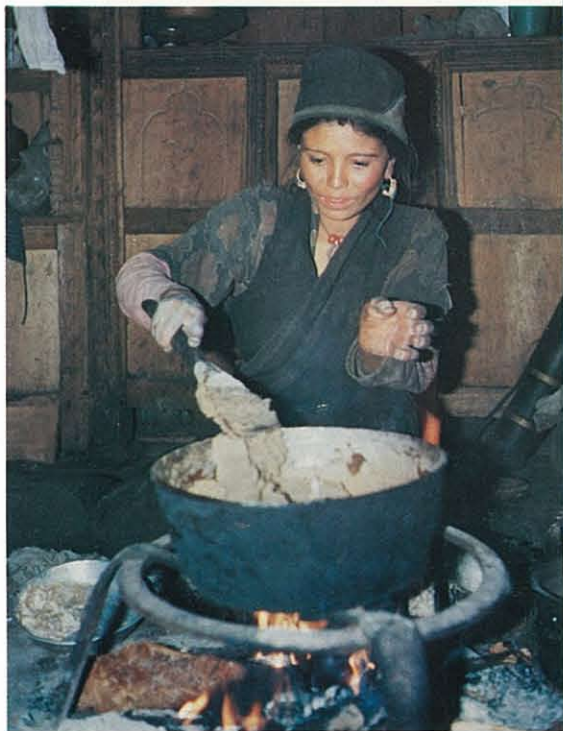
アジア・アフリカの言語の習得のための教育訓練は、わが国では開発がおくっていた分野ですが、その技術の開発のために、1967年からほぼ毎夏、実験的に、朝鮮語、ベンガル語、現代ヘブライ語、エチオピア語、スワヒリ語、ビルマ語（大阪外国語大学において）、福建語、チベット語の研修を、それぞれ一言語か二言語ずつ実施しました。1974年からは本格的に行なうことになり、当研究所所員を中心的組織者とし、母国語話者及び日本人研究者を指導者として、1974年夏には朝鮮語、チベット語、1975年夏にはカンボジア語、ベンガル語の研修が、各言語それぞれ約10名の全国から公募された研修生に対して行われました。研修生は検定料、入所料、受講料を納付し、毎週5日、毎日6時間、8週間の研修を受け、全受講時間数を記入した修了証書を授与されます。



海外学術調査

当研究所は、その性格上、アジア・アフリカの現地調査を重要な機能のひとつとして
います。これまでに当研究所の所員によって組織された海外学術調査は以下の通りで、
そのうち、(1)(4)は今年度に至るまで継続されています。

- (1) アフリカ部族社会の比較調査 1969年～
- (2) ヨーロッパ東南部農村調査 1970年
- (3) 東南アジア・ナショナリズムの形成過程における地域社会の変動 1972年
- (4) イスラム圏社会・文化変容の比較調査 1974年～
- (5) 中国・インド文明接触地帯における自然、生態と文化に関する調査 1975～



助手等の現地投入

アジア・アフリカの言語を自由に話し、読み、書くことができ、かつ、生活を通じてその文化を吸収した研究者を養成するために、当研究所は助手等の若い研究者を、それぞれ2年の期間、アジア・アフリカの諸国に送っています。

この計画は1967年から実施され、現在までに合計10名がエチオピア、タンザニア、ナイジェリア、アラブ連合、インド、モロッコ、香港、ケニア、ボツワナ、ザンビア等々の諸国に派遣され、そのうち2名は目下現地で研修中です。



外国人研究員ほか

研究所は、その共同利用研究活動の一環として、外国のアジア・アフリカの言語文化研究の専門家を外国人研究員として受け入れ、研究上の便宜を供与します。1975年度までの外国人研究員は以下の通りです。

Gordon T. Bowles

アメリカ 人類学専攻 1967年10月6日～1968年9月15日

Muhammad Anis

エジプト 近代史専攻 1968年10月2日～12月25日

Raouf Abbas Hamed

エジプト 近代史専攻 1973年4月1日～9月19日

Yellava Subbarayalu

インド 南インド中世史専攻 1973年10月1日～1975年10月31日

Fe Aldave-Yap

フィリピン フィリピン国語学専攻 1975年9月20日～12月21日

金完鎮

大韓民国 韓国語学専攻 1975年8月20日～

Curtis D. McFarland

アメリカ 言語学専攻 1976年2月20日～

研 究 生

また研究生の制度があり、大学卒業かそれと同等以上の学力のある者が研究所で研究に従事することを希望するときは、研究生として入所を許可することがあります。研究生は入所料と研究料を納付し、指定の教官の指導を受けます。

施設

図書室

アジア・アフリカ研究に必要な図書および図書利用のための設備は、共同利用研究機関として重要な要素であります。研究所開設以来図書資料は徐々に増加していますが、その充実については今後とも多大な努力を要します。蔵書の中にはアジア・アフリカ地域の国語教育資料、雑誌(366種)、新聞(51種)、世界各国語の聖書、などが含まれています。図書の他に、マイクロ資料、各種の語学レコードおよび録音テープなどもあり、また利用者の便宜を考えてマイクロリーダーとリーダー・プリンターを備えています。



音声学実験室

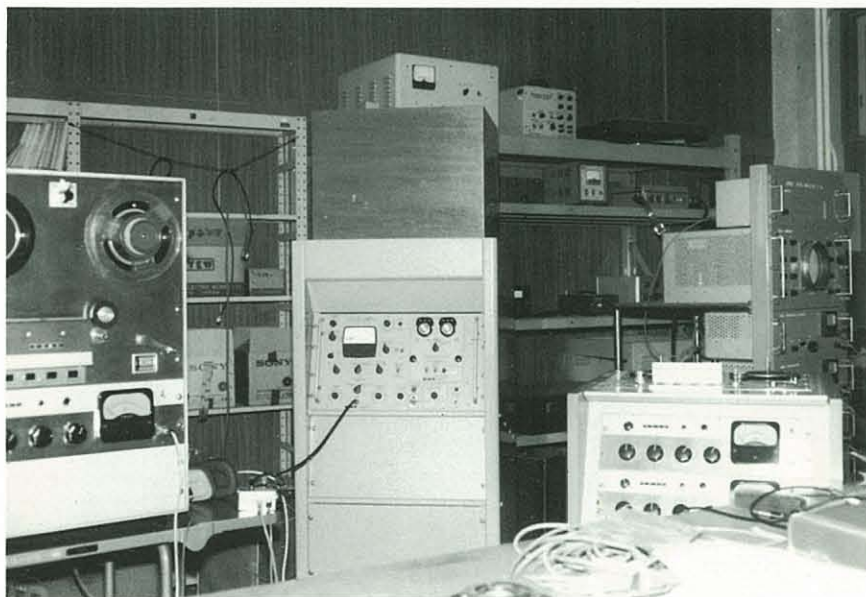
「スワヒリ語のイントネーションなんですが、基本周波数の動きは？」

「タイ語の声調の上がり下がりを目で見て確かめたいんですが…」

「ウズベク語ってどんなことばですか？ 実際に録音したものがありますか？」

「言語研修に使う教材を、良い条件で録音したいんだけど……」

こんな例は、音声学実験室の活動のほんの一部にすぎません。2台のサウンドスペクトログラフやピッチインジケータをはじめとした、種々の音声分析用機器が、フィールド調査で収集された音声資料の到着をまちかまえています。めずらしい言語や、貴重な民話・民俗音楽などがテープに複写されて、皆さんの利用を待っています。放送局級の録音機器をそろえた録音室では、マザーテープの作製・複写・ビデオ録画など何でもこなしてしまいます。



言語情報機械処理準備室

コンピューターへの入力データ作成のために、漢字タブレット1台とカード穿孔機1台とを現在使用しています。

アジア・アフリカの諸言語の中には、インド系の文字を使用しているクメール語、タイ語、ラオス語、ビルマ語、チベット語、インド諸言語、アラビア系文字を使用しているアラブ諸語、ペルシア語、ウルドゥー語、ヘブライ語、エチオピア語、それに中国語や日本語のように、文字数の多い言語が多いので、漢字タブレットを利用しているわけです。カード穿孔機の方は、ラテン文字を使用しているインドネシア語やスワヒリ語、ハウサ語などのアフリカ諸言語、それに独特の文字を使用してはいますが文字数の少ない朝鮮語、それに文字のない言語で所員が音声記号で表記して集めた資料などの処理に使用されています。

言語情報処理は、科学技術計算と違って作成するデータの量が非常に多いので、これら入力用機器の整備拡充に力を入れていく方針です。



出版物一覽

アジア・アフリカ言語文化研究 Journal of Asian and African Studies, Nos. 1 (1968), 2 (1969), 3 (1970), 4 (1971), 5 (1972), 6 (1973), 7 (1974), 8 (1974), 9 (1974), 10 (1975), 11 (1976).

アジア・アフリカ言語文化研究所通信, Nos. 1~26 (1966~76).

アジア・アフリカ言語文化叢書

1. ピア・アヌマーン・ラーチャトン著・河部利夫訳註, タイ農民の生活, 1967.
2. 家島彦一訳註, イブン・ファドラーンのヴォルガ・ブルガール旅行記, 1969.
3. MATSUSHITA, S. An Outline of Gwandara Phonemics and Gwandara-English Vocabulary, 1972.
4. NAKANO, A. Conversational Texts in Eastern Neo-Aramaic (Gzira Dialect), 1973.
5. TSUCHIDA, S. Reconstruction of Proto-Tsouic Phonology, 1976.
6. NAGATA, Y. Muhsin-Zâde Mehmed Paşa ve Ayanlık Müessesesi, 1976.
7. YAJIMA, H. A Chronicle of the Rasūlid Dynasty of Yemen, 1976.

アジア・アフリカ基礎語彙集

1. 山本謙吾, 満州語口語基礎語彙集, 1969.
2. 梅田博之, 現代朝鮮語基礎語彙集, 1971.
3. 橋本萬太郎, 客家語基礎語彙集, 1972.
4. 和田正平, イラク語基礎語彙集, 1973.
5. 石垣幸雄, エチオピア比較語句集, 1974.
6. 守野庸雄, スワヒリ語基礎語彙用例集, 1975.
7. 坂本恭章, モン語語彙集, 1976.

共同研究報告

1. アジア・アフリカ言語調査票 (上・下), 1967.
2. 「イスラム化」に関する共同研究報告, Nos. 1 (1968), 2 (1969), 3 (1970), 4 (1971), 5 (1972), 6 (1973).
3. 現代インド・パキスタン文学共同研究報告, Nos. 1 (1970), 2 (1971), 3 (1972).
4. アジア・アフリカにおける宗教運動共同研究報告, Nos. 1 (1972), 2 (1972), 3 (1973).
5. アジア・アフリカ文法研究, Nos. 1 (1972), 2 (1973), 3 (1974).
6. Asian and African Grammatical Manual (アジア・アフリカ文法便覧):
Cushitic (ISIGAKI, Y. 1972), Romance & Greek (ISIGAKI, Y. 1973), Korean (UMEDA, H. 1973), Hausa (MATSUSHITA, S. 1974), Fulfulde (EGUCHI, K. 1974), Cambodian (SAKAMOTO, Y. 1974), Burmese (YABU, S. 1974), African (ISIGAKI, Y. 1975), Thai (MORI, M. 1975), Philippine Languages (YAMADA, Y. & TSUCHIDA, S. 1975), Swahili (MORINO, T. 1976), Persian (KAMIOKA, K. 1976), Uralic (ISIGAKI, Y. 1976).

7. アフリカ部族社会の比較研究：1. アフリカ部族社会の特質をめぐって (1971),
2. アフリカ社会の地域性 (1973).
8. トルコ民族とイスラム化に関する共同研究報告, 1 (1974).
9. アジア・アフリカ語の計数研究, 1, 2 (1975), 3, 4 (1976).
10. *Oceanic Studies* vol. 1 (1976).

AFRICAN LANGUAGES AND ETHNOGRAPHY

1. EGUCHI, K. *Miscellany of Maroua Fulfulde*, 1974.
2. MATSUSHITA, S. *A Comparative Vocabulary of Gwandara Dialects*, 1975.
3. MOHAMMADOU, E. *L'Histoire des Peuls Férôße du Diamaré: Maroua et Pétété*, 1976.
4. EGUCHI, K. *Gimortuubu of Fulfulde*, 1976.
5. WADA, S. *Iraqw Folktales*, 1976.
6. NAKANO, A. *Dialogs in Moroccan Berber Dialects*, 1976.

STUDIA CULTURAE ISLAMICAE

1. NAKANO, A. *Basic Vocabularies in Standard Somali (I)*, 1976.
2. MIKI, W. *Index of the Arabic Medicinal Plants*, 1976.
3. YAJIMA, H. *The Arab Dhow Trade in the Indian Ocean*, 1976.
4. NAGATA, Y. *Some Documents on the Big Farms (Çiftlik) of the Notables in Western Anatolia*, 1976.
5. MIYAJI, K. "Kacem Ali"-*Monographie d'un domaine autogéré de la plaine de Mitidja (Algérie)*, 1976.
6. MIYAJI, M. *L'Emigration et le changement socio-culturel d'un village Kabyle (Algérie)*, 1976.

言語研修テキスト

1. チベット語, 北村甫ほか編, 全5冊 (1974).
2. 朝鮮語, 梅田博之ほか編, 全3冊 (1974).
3. カンボジア語, 坂本恭章ほか編, 全5冊 (1975).
4. ベンガル語, 奈良毅編, 1冊 (1975).

職員

所長(併)教授 北村 甫

研究部

教授 河部 利夫	助教授 三木 亘	助手 森 幹 男
教授 富川 盛道	助教授 原 忠彦	助手 内藤 雅雄
教授 岡田 英弘	助教授 坂本 恭章	助手 中嶋 幹起
教授 梅田 博之	助教授 日野 舜也	助手 松下 周二
教授 飯島 茂	助教授 土田 滋	助手 永田 雄三
教授 石垣 幸雄	助教授 中野 暁雄	助手 藪 司郎
教授 大江 孝男	助教授 中家 島彦一	助手 辻 伸久
教授 橋本 萬太郎	助教授 湯川 恭敏	助手 福井 勝義
教授 中村 平次	講師 上岡 弘二	助手 加賀谷 良平
教授 山口 昌男	講師 守野 庸雄	助手 石井 溥一
教授 奈良 毅		助手 羽田 亨
		助手 高知 尾仁

事務部

事務長	関口 儀三郎
文部事務官	浦川 道義
事務長補佐	
文部事務官	

庶務係

係長	岩田 克己
文部事務官	石橋 徳三郎
庶務主任	
文部事務官	宮下 喜久子
文部事務官	浅野 通夫
文部技官	増田 経秋
文部事務官	金子 鍵蔵
(守衛)	
用務員	植田 カツエ
用務員	横田 英一
技能補佐員	小林 芳郎

渉外係

係長	戸田 孝司
文部事務官	井上 由美子
文部事務官	大村 和子
文部事務官	佐久間 敬喜

会計係

係長	谷津 成洪
文部事務官	遠藤 吉則
會計主任	
文部事務官	名倉 武二郎
文部事務官	田川 恵二
文部事務官	石川 房江

共同利用係

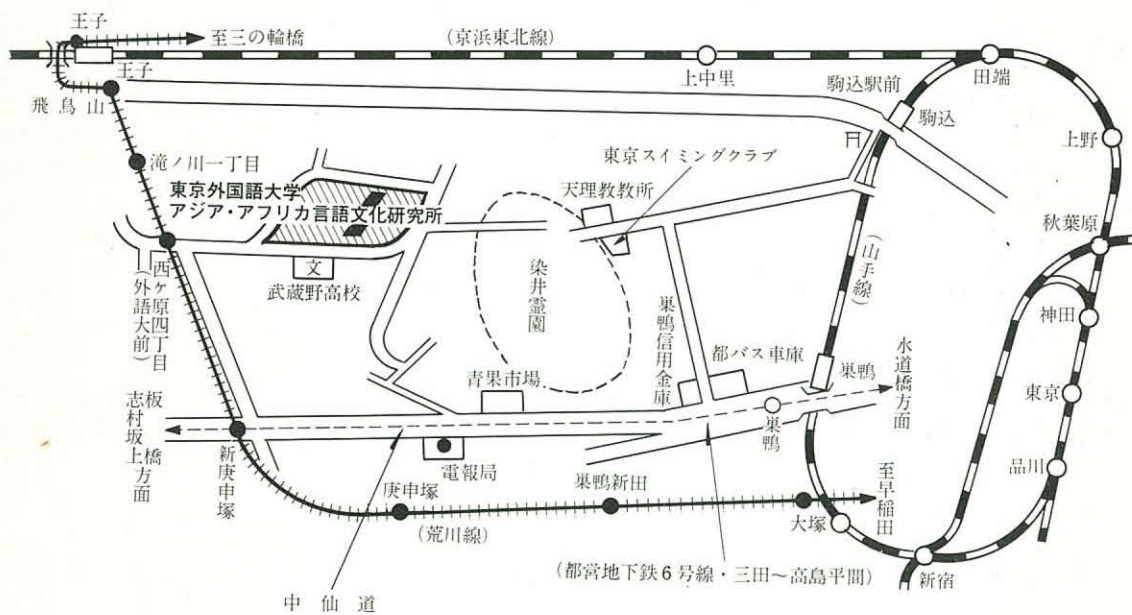
係長	宮森 てる子
文部事務官	宇都宮 京子
文部事務官	鈴木 喜久子
文部事務官	津田 貞子
文部事務官	森野 環
文部事務官	松本省三
文部事務官	渡辺 勇二

研修係

係長	安田 隆
文部事務官	岡田 ほなみ
文部事務官	中嶋 弘子
文部事務官	田川 富美子

図書係

係長	浅見 義則
文部事務官	石川 恵子
文部事務官	中川 陽子
文部事務官	植木 天津子
文部事務官	須郷 知子
文部事務官	山田 穰



所在地 東京都北区西ヶ原4丁目51番21号 〒114
TEL (917) 6111

都電荒川線西ヶ原4丁目(外語大前)から徒歩約3分

